

Title	福島方言のノダッケ : 実は俺、まだ学生なんだっけ
Author(s)	白岩, 広行
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2008, 8, p. 14-29
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/23241">https://doi.org/10.18910/23241</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 福島方言のノダッケ —実は俺、まだ学生なんだっけ—

白岩 広行

【キーワード】 福島方言、ノダ、文末詞ケ、説明、前置き

### 【要旨】

福島方言の文末詞ケは「思い出し」の意味しか持たない (§2)。しかし、ノダにケが接続したノダッケという表現のなかに、ケの「思い出し」の意味にはそぐわないものが見られる (§3)。本稿では、このノダッケを、ひとまとまりの文末表現として分析した。その特徴は以下の通り。

#### 形態統語論的特徴

必ず平叙文の文末に生起する。また、いずれの文末詞とも共起しない (§4)

#### 基本的意味

先行文脈に対する説明づけ、あるいは後の文脈の前置きとして、聞き手にとって未知と話し手が考えている情報を提示する (§5.1)。

ノダッケは、ノダと同じく説明づけに関わる表現だが、ノダよりも使われる用法は限られている。つまり、ノダの様々な用法のうち、次の3つの条件を満たす場合にしか使えない (§5.2)。

- ① 対人的な用法
- ② 前か後いずれかの文脈との関係づけが見られる
- ③ 当該の情報が聞き手にとって未知である (と話し手が考えている)

談話的な面では、話し手のターンを維持するために使われることがある (§5.3.1)。また、聞き手に反発をするような場合、特殊な現れ方をする (§5.3.2)。

### 1. はじめに

東北諸方言の文末詞ケについては、ムード・テンスの両面から様々な議論がなされており、「思い出し」「報告」あるいは「過去」といった幅広い意味機能を持つことが知られている。しかし、関東にほど近い福島方言 (本稿では福島市に伊達市・伊達郡を含めた県北地方の方言を指す。分析にあたって内省をおこなう筆者の主たる生育地が福島市と隣町の伊達郡保原町 (現伊達市) にまたがるため) では、東京方言と同様、ケは基本的に「思い出し」の意味しか持たない (§2.2. および福島市方言における吉田 2004 の記述参照)。

ところが、ノダ (ンダ) と共起してノダッケ (ンダッケ) という形をとった場合に限り、「思い出し」とは異なる、聞き手に積極的に情報を提示するような機能を担いうる。例えば、(1) ではパーティーを休むことの説明づけとして「腹が痛い」という情報を聞き手に提示している。また、(2) では「長崎屋がつぶれていてびっくりした。」という発話の前置

きとして「久しぶりに駅前に行った」という情報を提示している（このようなノダッケは平板なイントネーションをとり、音調の面でも「思い出し」のケとは区別される。§3.参照）。

(1) 今日のパーティー休ませてもらうわ。俺、今、腹痛インダッケ。

(2) 昨日、久しぶりに駅前に行ッタンダッケ。

そしたら、長崎屋がつぶれていてびっくりした。

(3) (同窓会で久しぶりに旧友と会って)

太郎：お前は大人になっても相変わらずガキみたいだな。

次郎：あ、やっぱり分かる？ 実は俺、まだ学生ナンダッケ。

このような文末表現ノダッケは、半沢・武田 (2005) のグロットグラムによれば、福島市・郡山市・いわき市など、福島県内の広い地域に分布しており、特に 1960 年代生まれ以降の比較的若い世代において使用されている。

本稿では、この福島方言の文末表現ノダッケを取り上げ、その文法的な特性を記述する。論文の構成としては、まず §2. で福島方言の文末詞ケの性格づけを行う。その後、§3. で福島方言にはノダとケに分けて説明することのできないひとまどりの文末表現ノダッケ（上の例文のようなもの）があることを示す。そして、§4. では形の面から、§5. では意味的な面から、その文末表現ノダッケの記述をおこない、§6. でまとめとする。

なお、分析にあたっては当該方言を母方言とする筆者の内省を用いる<sup>1)</sup>。例文は、焦点となる述語形式のみを漢字カタカナ表記の方言形で示し、残りは共通語訳とする。その上で、非文は\*、運用的に不適切な文は#、不自然な文は?、かなり不自然な文は?? を付して示す。

また、ノダ・ノダッケは実際にはンダ・ンダッケと発音されるが、「のだ文」に関する先行研究にならい、本文中の表記はノダ・ノダッケとする。同じく、福島方言のケは必ず「ッケ」と促音をともなうが、こちらも先行研究にならい、本文中の表記はケとする。

## 2. 福島方言の文末詞ケ

本節では、まず東北諸方言のケに関する先行研究を示した後 (§2.1)、福島方言の文末詞ケが先行研究で記述された他の東北諸方言のケとは異なり、「思い出し」の用法しか持たない（つまり、東京方言のケに近い）ことを示す (§2.2)。

1) 筆者に関する情報は以下のとおり。

1982年福島県保原町（現伊達市）生まれ。両親とも保原町出身。

居住歴—0-5歳：福島県福島市 5-7歳：同保原町 7-12歳：同郡山市

12-14歳：同白河市 14-18歳：同福島市 18-25歳（現在）：大阪府豊中市

このうち福島市と保原町が福島県東北地方に含まれる（保原町は福島市のベッドタウン）。なお、筆者の感覚ではノダッケは同じ県北地方でも、より南部、具体的には福島駅より南の地域で盛んなように思われる（筆者は福島市では南福島駅近辺に居住）。このことは半沢・武田 (2005) のグロットグラムからも読み取れるが、本稿は地理的な分布は考えず、文法的な記述のみに焦点をあてる（筆者は同じくノダッケの分布する郡山市にも居住経験があるが、ノダッケの文法的な特性について大きな地域差はないように思われる）。

## 2.1. 東北諸方言のケ

東北諸方言のケについては様々な研究がなされているが、目撃性という基本的な意味を持つ点ではほぼ共通の特徴が見られ、テンス的には「過去」、モダリティ的には「報告」「思い出し」などの表現として機能することが報告されている<sup>2)</sup>。以下では、その例として、記述の厚い山形市方言の場合（渋谷 1999、竹田 2004）を取り上げ、その特徴を概観する。

渋谷（1999）によれば、山形市方言のケはモダリティ的に、記憶の検索による「思い出し」や見てきたことの「報告」という用法を持つ。

(4) そういえば太郎はそのころ時々東京にイッタケなあ（思い出し）

(5) 太郎はせっせと宿題をシタケ（報告）（渋谷 1999:213 より）

これを疑問文で用いると、記憶を検索しても思い出せないことや、聞き手に対する報告の要求が表される。

(6) そのころ太郎は宿題なんてシタケガー？（思い出し）

(7) どうだった？ 太郎はちゃんと宿題シタケガ？（報告要求）

（渋谷 1999:216 より）

さらに、状態性の用言に後接した場合、ケは過去を表すテンスマーカのように使われる（山形市方言では、基本的に状態性の用言がタ形をとることはない）。

(8) 太郎は昨日元気イーケ（過去）（渋谷 1999:216 より）

以上のような特徴は、多少の異同はあるものの（「過去」の意味は担わない方言もある）、関東に近い地域を除けば、注2に示した他の東北諸方言のケにもほぼ共通して見られる<sup>3)</sup>。

## 2.2. 福島方言のケ

ここでは、本稿の対象とする福島方言において文末詞ケの記述をおこない、福島方言のケが他の東北諸方言のケに比べて意味領域が狭く、東京方言のケに近いことを示す。

前項で見たとおり、東北諸方言のケは「思い出し」「報告」「過去」のような意味を持つが、東北地方でも関東に近い地域においては意味の縮小が観察される。例えば、小林（2004）の記述する宮城県仙台市方言のケは、「過去」の意味を積極的に表さない（「思い出し」というムード性から副次的に過去の意味も含意するが、過去のマークはあくまでタが担って

2) 山形県南陽市（金田 1989）、山形県鶴岡市（渋谷 1994）、山形県山形市（渋谷 1999、竹田 2004）、秋田県（長澤 1999）、宮城県仙台市（小林 2004）、山形県東根市、秋田県平鹿町、岩手県盛岡市、福島県福島市（以上、吉田 2004）、岩手県遠野地方（高田 2004）などにおける記述がある。また、東北以外に、静岡県方言でもケの記述が多く見られる（山口 1968;1999、中田 1979、松丸 2004 など）。

3) このほか、接続表現としてのケが（福島方言を含めて）東北諸方言で広く使われているが、テンス・ムードに関わる文末詞ケとは性格を異にしており、ノダッケとも関連性が考えられないため、本稿では扱わない。

例) 学校に行ッタッケ、休みだった。（学校に行ったら、休みだった）

いる)。また、「報告」の用法に似た「太郎は今日、2時間も勉強をしたッケよ」のような文<sup>4)</sup>が世代を下るごとに使われなくなっている。また、吉田(2004)の記述する福島市方言の事例では、老年層の段階で既に「思い出し」以外の用法は使われにくくなっており、東京方言のケとほぼ同じものになっている。

以上の先行研究をふまえ、以下では筆者の内省をもとに福島方言のケについて簡潔に記述する。

まず、形の面でいえば、ケは形式自体が語形変化することはない。また、必ず文末に生起し、従属節内に生起することはない。

(9) 昨日は雨ダッケ {\*ガラ/\*ケド}、…

(10) そういえば、昨日は雨ダッケ。

また、他の文末詞としてカ、ナは後接しうるが、情報提供に関わるゾ、ヨ、および確認要求に関わるシタ<sup>5)</sup>は後接できない。

(11) 昨日は雨ダッケ {ガ/\*シタ/\*ゾ/\*ヨ/ナ}。

意味の面では、ケは「思い出し」の用法に限って用いられ、「報告」の用法は持たない。

(12) そういえば太郎はそのころ時々東京にイッタッケナー。

(13) そのころ太郎は宿題なんてシタッケガ？

【思い出し】

(14) \*太郎はせっせと宿題をシタッケ。

(15) \*どうだった？ 太郎はちゃんと宿題シタッケガ？

【報告】

また、過去のマークはタが担っており、ケが積極的に過去をマークすることはない。このことは、タとケが共起可能なことから確認できる。

(16) そういえば、昨日は試験がアッタッケ。

以上にあげた福島方言ケの特徴は、(17)のように動詞・形容詞のル形に接続して非過去の事態の思い出しで使えることを除けば、又平(1996)や渋谷(1999)の記述する東京方言(および共通語)のケとかなり似ており、前項で見た他の東北諸方言のケとは性格を異にしている。

(17) そういえば明日は飲み会がアルッケ。

### 3. 2つの「ノダッケ」

前節では、福島方言の文末詞ケについて簡単な記述をおこなった。本節では、この文末

4) 小林(2004)は仙台市方言のケをすべて「思い出し」の枠内で解釈しており、「報告」という用法は認めていない。しかし、「太郎は今日、2時間も勉強をしたッケよ」という文は、自分の目撃した事態を聞き手に伝えるものであり、「報告」に近い意味を持つように考えられる。

5) 福島方言のシタは共通語のいわゆるデハナイカー類(田野村1988)にはほぼ相当する確認要求表現である。その特徴に異同はあるが、山形市方言のシタに関する渋谷ほか(2006)の記述も参考にされたい。

詞ケがノダ文に後接したというだけでは説明のつかない、ひとまとまりの文末表現としてノダッケという形式があることを示す。

まず (18) (19) の例を見る。

(18) そういえば、今日はみんなで芋煮会に行グンダッケ。

(19) あれ、誰と芋煮会に行グンダッケ？ 【ノダ+文末詞ケ】

(18) (19) のようなノダッケは、「芋煮会に行く」という予定を思い出したり、思い出そうとしたりする文脈で用いられている。このような場合のノダッケは、前節で述べた文末詞ケがノダに後接したものとして解釈できる（なお、福島方言のノダは、筆者の内省する限り、意味的には共通語のノダとほぼ同じ特徴を持っている）。

一方、福島方言では、例えばパーティーを休む理由を説明する (20) のような場面でもノダッケという形式が使われる。

(20) 今日のパーティー休ませてもらうわ。俺、今、腹痛インダッケ。 (=1)

【文末表現ノダッケ】

しかし、これをノダに文末詞ケが後接したものと解釈すると、意味的に矛盾が生じる。つまり、「今、腹が痛い」という事実は話し手にとって思い出す（記憶を検索する）までもなく明らかなことであり、文末詞ケの「思い出し」という意味特性にそぐわないのである。したがって、(20) のようなケはノダとケに分けず、ひとまとまりの文末表現として解釈するのが適当と考えられる。

このように、福島方言のノダッケには、意味的に「思い出し」を表し、ノダ+ケに分解できるもの (=18, 19) と、「説明づけ」として機能する固定的な文末表現ノダッケ (=20) の2つがある。この区別について、もう少し詳しく見る。

まず、形態的な面で見ると、(18) (19) のような「思い出し」のノダッケにおいては、ノダとケは別個の形式としてとらえられるので、ノダは自由に語形変化しうる。これに対し、(20) のように事情を説明する意味のノダッケは、必ずノダッケという決まった形で使われており、ノダが語形変化することはない。

(21) そういえば、今日は芋煮会に行グンダッタッケ。

(22) そういえば、今日は芋煮会に行グンジャンナイッケ。 【ノダ+文末詞ケ】

(23) 今日のパーティー休ませてもらうわ。#俺、今、腹痛インダッタッケ。

(24) 今日のパーティーやっぱり出るわ。#俺、今、腹痛インジャンナイッケ。

【文末表現ノダッケ】

((23) (24) の文は、他のことに気をとられて「腹が痛い／痛くない」ことを忘れていて、それをその場で「思い出す」という文脈でしか使うことができない。)

また、ノダとケに分解できるノダッケの場合、文末が、平叙文では自然下降、疑問文では上昇調のイントネーションパターンをとるが、事情を説明するノダッケでは、文末を含めたそのイントネーション句全体が平板なイントネーションをとる。つまり、両者は音調

の面からもはっきり区別される。図 1 に以下の例文の「行グンダッケ」の箇所を筆者が読み上げた波形を示す（それぞれの拍の開始点にカタカナでその拍を示している）。

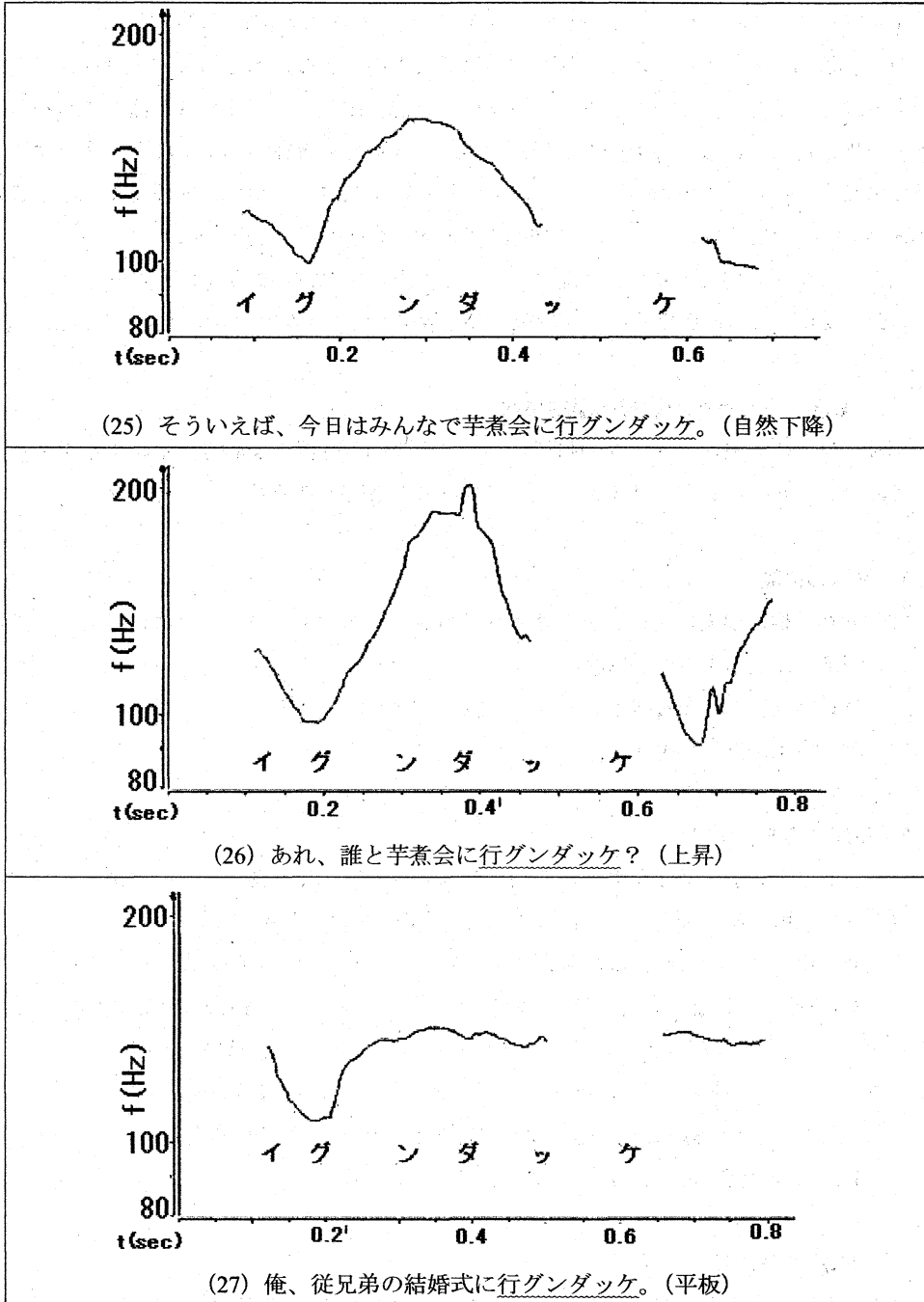


図 1 ノダッケのとり音調

(25) そういえば、今日はみんなで芋煮会に行グンダッケ。 (＝18)

(26) あれ、誰と芋煮会に行グンダッケ？ (＝19)

(27) 来週のパーティー休ませてもらうわ。俺、従兄弟の結婚式に行グンダッケ。

以上、福島方言においてはノダとケに分けることのできない固定的な文末表現ノダッケがあることを示した。このようなノダッケは、「思い出し」に意味領域を縮小させる前のケの特性が化石的に残ったものとも思えるが、少なくとも現在の体系では)ノダとケに分けて解釈することはできない。そのため、文末詞ケ (§2.2.)とは別に記述をおこなう必要がある。以下、次節以降ではこの文末表現ノダッケを取り上げて記述を行う。

なお、これ以降特に断りのない場合、ノダッケといえは、平板なイントネーションを付与され、(20)のように固定的な文末表現として解釈されるノダッケの方を指すことにする。

#### 4. 文末表現ノダッケの形態統語論的特徴

本節では、文末表現ノダッケの特徴について、文内の位置 (§4.1.)、生起する文タイプ (§4.2.)、共起する文末詞 (§4.3.)と、形の面から簡単に整理する。

##### 4.1. 文内の位置

文末詞ケを構成要素に含むことを考えれば当然ではあるが、ノダッケは必ず文末に生起し、従属節内に生起することはない。

(28) 実は、俺、今腹痛インダッケ {\*ガラ/\*ケド}、…。

(29) 実は、俺、今腹痛インダッケ。

##### 4.2. 生起する文タイプ

ノダッケは平叙文に限って生起し、それ以外のタイプの文に生起することはない(なお、ノダとケに分解可能な「思い出し」の意味ならば疑問文にも生起可)。

(30) 俺、これから仙台に行グンダッケ。 【平叙文】

(31) \*俺、これから仙台に行グンダッケガ？ 【Yes-No 疑問文】

(32) \*俺、これからどこに行グンダッケ？ 【WH 疑問文】

(33) \*よし、明日、仙台に行グベンダッケ。 【意志文】

(34) \*ねえねえ、明日、一緒に仙台に行グベンダッケ。 【勧誘文】

(35) \*お前も明日仙台に行ゲンダッケ。 【命令文】

##### 4.3. 文末詞との共起

ノダッケは文末詞とは共起しない(これも、ノダとケに分解可能な「思い出し」の意味なら (11) のとおり、カ、ナと共起可)。



(36) 俺、今、腹痛インダック {\*ガ/\*シタ/\*ゾ/\*ヨ/\*ナ}。

## 5. 文末表現ノダックの用法

本節では、ノダックの用法として、まず基本的な意味を提示し (§5.1.)、次に、同様の意味を持つノダと比較することによってノダックの特徴をより明確に把握する (§5.2.)。そして最後に、談話的な特徴について述べる (§5.3.)。

### 5.1. 基本的意味

ノダックは、(37) ~ (39) のように先行する文脈に対してその事情や意味づけを説明したり、(40) (41) のように後の文脈の前置きを述べたりする場合に使われる。(37) では「パーティーを休む」ことの背景的な事情を説明するために「腹が痛い」ということを、(40) では「長崎屋がつぶれていてびっくりした」という発話につなげるための前置きとして、「久しぶりに駅前に行った」ということを、ノダックによって提示している。

(37) 今日のパーティー休ませてもらうわ。俺、今、腹痛インダック。 (=1)

(38) ノート貸してくれない? 明日、試験ナンダック。

(39) 目が覚めたら新幹線が白石蔵王に着いていて困ったよ。

まあ、つまり、寝過ゴシチャタンダック。

(40) 昨日、久しぶりに駅前に行ッタンダック。

そしたら、長崎屋がつぶれていてびっくりした。 (=2)

(41) 来週、同窓会がアルンダック。今から楽しみで仕方ないよ。

このような特徴をふまえ、本稿ではノダックの基本的な意味を次のようにとらえる。

(42) ノダックの基本的意味

先行文脈に対する説明づけ、あるいは後の文脈の前置きとして、聞き手にとって未知と話し手が考えている情報を提示する。

以下、この基本的意味について簡単に説明する。

まず、文脈との関わりであるが、その場で事態を認識した場合や、質問に対して機械的に答える場合など、ノダックは前後の文脈との関連づけが考えられないような状況では使うことはできない。

(43) (財布がないのに気づいて) \*あれっ、財布がナインダック。

(44) (聞き手のかっこいい姿を見て) おお、すごい。\*お前のこと見直シタンダック。

(45) A: 1 たす 1 は何だ。

B: #2 ナンダック。

また、ノダックによって提示されるのは、聞き手にとって未知と話し手が考えている情報であり、「ほら」「お前も知ってのとおり」のような表現とは共起しない。

(46) 大学はあきらめてくれ。

{\*ほら/\*お前も知ってのとおり}、うちは貧シーンダッケ。

一方、聞き手に事情を打ち明ける「実は」のような表現は共起しやすい。

(47) 大学はあきらめてくれ。実はうちは貧シーンダッケ。

## 5.2. ノダとの比較

前項ではノダッケが前後の文脈に対する説明づけや前置きの意味を持つことを見たが、同様の意味はノダによっても実現される。

(48) 今日のパーティー休ませてもらうわ。俺、今、腹 {痛インダ/痛インダッケ}。

(49) 昨日、久しぶりに駅前に {行ッタンダ/行ッタンダッケ}。

そしたら、長崎屋がつぶれていてびっくりした。

共通語においても、「のだ」が説明づけの意味を持つことは知られているが、同様のことは福島方言のノダについても言えるわけである。それでは、ノダッケはノダとどのように異なるのであろうか。本項では、ノダと比較をすることにより、ノダッケの特徴をより明確にとらえることとする。

### 5.2.1. 「のだ」の用法

ここでは、ノダの用法を考えるにあたって、共通語の「のだ」に関する論を参照枠として用いる。共通語の「のだ」については、田野村 (1990;1993) や野田 (1997) が主な立場として挙げられるが、本稿では、用法をより細かく分類しており、参照枠として使いやすいと判断した野田 (1997) の枠組みを参考にする。

野田 (1997) によれば、共通語の「のだ」は、「ムードの「のだ」」と「スコープの「のだ」」に分かれる。

「スコープの「のだ」」とは否定文・疑問文に顕著に見られるもので、「の」によって前接する部分を名詞化し、否定・疑問のスコープを広げる機能を持つ。

(50) [悲しいから泣いた] んじゃない。

(cf. \*悲しいから泣かなかった。)

(51) [私に聞いている] んですか？

(cf. ??私に聞いていますか?)

([ ] は否定・疑問のスコープを示す)

同様の機能は、平叙文においても (52) のような「枠組み固定文」などでは明瞭に示される。

(52) 私は [文学部を卒業した] のではない。[法学部を卒業した] のだ。

(cf. #法学部を卒業しなかった。)

また、「ムードの「のだ」」は、先行文脈に関係づけるか否か (関係づけ/非関係づけ)、話し手による事態の把握を表すか聞き手への事態の提示を表すか (対事的/対人的) によって、次の4つに分類される。

表1 野田論文におけるムードの「のだ」の枠組み (野田 1997:67 より)

	対事的ムードの「のだ」	対人的ムードの「のだ」
関係づけ	Pの事情・意味として Qを把握する	Pの事情・意味として Qを提示する
非関係づけ	Qを(規定の事態として) 把握する	Qを(規定の事態として) 提示する

(筆者注：Pとは状況や先行文脈、Qは「のだ」に前接する部分)

- (53) 山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。 【対事的・関係づけ】  
 (54) そうか、このスイッチを押すんだ。 【対事的・非関係づけ】  
 (55) 僕、明日は来ないよ。用事があるんだ。 【対人的・関係づけ】  
 (56) このスイッチを押すんだ。 【対人的・非関係づけ】

これらの用法については、詳しくは、§5.2.2.でノダッケの用例を検討する際に例文を列挙するので、そちらを参照されたい。

以上のような共通語「のだ」の意味機能は、筆者の内省する限り、福島方言のノダでもほぼ変わらない<sup>6)</sup>。よって、以下、この枠組みを参考に、ノダッケの意味領域がノダの各用法のうちどの意味領域で重なっているのか、分析を進める。

## 5.2.2. 野田(1997)の枠組みによる比較

### 5.2.2.1. スコープの「のだ」

ノダッケは否定形式(ネー)を後接することができず(\*ノダッケネー)、疑問文で生起することもない(§4.2.)。したがって、疑問や否定のスコープを広げることは形態的に不可能である。

(57) 悲しいから泣イタ {ンジャネー/ンダッケネー}。

(58) <sup>7)</sup> 俺に聞イテ {ンノカ/ンダッケカ} ?

また、平叙文についても、スコープの「のだ」としての解釈が顕著に現れる「枠組み固定文」の読みでは使用しにくい。

(59) (太郎が友人の次郎の履歴書の書き方をチェックしている)

太郎：あれ？ お前、文学部を出たんだよな？

6) 意味面はほぼ同じだが、形式的な面では以下の2点で違いが見られる。

① /-ru/で終わる動詞に接続した場合、/-nda/になることが多い。

例：「ヒッパル+ノダ」は「ヒッパンダ」/共通語「引っ張るんだ」

② Yes-No 疑問文でンダの形をとりうる(共通語はノの形)。

例：「明日は仕事にイグンダガイ？」/共通語「\*行くんだかい」

7) 「思い出し」を表す「ノダ+ケ」の表現ととれば、適格。

次郎：いやいや、文学部を出たんじゃない。

法学部を出ダ {ンダ/#ンダッケ}。

以上から、ノダッケにはスコープの「のだ」にあたる機能はないと考えられる。

### 5.2.2.2. 対事的なムードの「のだ」

対事的なムードの「のだ」は、話し手が自分の認識していなかった事態を把握するものであり、聞き手を必ずしも必要としない用法である。この用法ではノダッケは使われない。

(60) 山田さんが来ないなあ。きっと用事がア {ンダ/\*ンダッケ}。

(61) (友人が運転しているのを見て) あ、あいつ、運転ス {ンダ/\*ンダッケ}。

(62) 太郎：俺、大学に行くんだ。

次郎：ふーん。じゃあ、4年も遊ンデイラレ {ンダ/\*ンダッケ}。

【関係づけ・対事的】

(63) そうか、このスイッチを押ス {ンダ/\*ンダッケ}。

(64) 太郎：伊達が勝ったって。

次郎：へーえ、伊達が勝ッタ {ンダ/\*ンダッケ}。

(65) <sup>8)</sup> そうそう、思い出した。ここにポストがア {ンダ/\*ンダッケ}。

【非関係づけ・対事的】

### 5.2.2.3. 対人的なムードの「のだ」

対人的なムードの「のだ」のうち、関係づけとされる用法、つまり先行文脈や状況と関係づけられる場合は、問題なくノダッケが用いられる。

(66) 僕、明日は来ないよ。用事がア {ンダ/ンダッケ}。

(67) 五十嵐はいないよ。旅行に行ッタ {ンダ/ンダッケ}。

(68) ノート貸してくれない？ 明日、試験ナ {ンダ/ンダッケ}。

【対人的・関係づけ】

一方、非関係づけとされる用法、つまり先行文脈や状況と関係づけられない場合は、ノダッケは基本的に使えない。

(69) 太郎：(次郎の傷つくことを言って) あ、ごめん。

次郎：イー {ンダ/#ンダッケ}。イー {ンダ/#ンダッケ}。

気にするな。

(70) (相手に指示をして) このスイッチを押ス {ンダ/#ンダッケ}。

(71) 保母：君は将来何になるの？

園児：僕は将来野球選手にナ {ンダ/#ンダッケ}。 【対人的・非関係づけ】

8) 「思い出し」を表す「ノダ+ケ」の表現ととれば、適格。

しかし、先行の文脈や状況と関係づけがなくとも、ノダッケに前接する要素が後で述べられることの前置きになるような場合は、ノダッケが使える。例えば、(72) (73) は、ノダ／ノダッケによってマークされた文は、先行文脈との関係づけはないが、後の文に対しては、その前置きのような形で関係づけられている。

(72) 昨日、久しぶりに駅前に行ッタ {ノダ／ノダッケ}。

そしたら、長崎屋がつぶれていてびっくりした。

(73)<sup>9)</sup> あのさ、さっき道を聞ガッチャ {ノダ／ノダッケ}。それで、教えてあげたら、  
すごく丁寧にお礼言ワッチャ {ノダ／ノダッケ}。すごく嬉しかった。

以上を整理すると、野田 (1997) は前の文脈との関係性をもとに「関係づけ／非関係づけ」の区別をしているが、ノダッケの使用にあたって関与的なのは、前後の文脈との関係性であり、前か後いずれかの文脈と関係性が見られれば、ノダッケの使用が可能ということになる。

### 5.2.3. 聞き手にとっての未知／既知の別による比較

野田 (1997) の枠組みによる分析は 5.2.2. のとおりだが、ここでは、ノダとノダッケの異同に関与的なもうひとつの要素についてふれる。§5.1. で述べたので、詳細は繰り返さないが、ノダッケは、その情報が聞き手にとって未知である (と話し手が考えている) 場合のみ使用される。一方、ノダにはそのような制限がない

(74) 大学はあきらめてくれ。

お前も知ってのとおり、うちは貧シー {ノダ／\*ノダッケ}。 (=46)

(75) 大学はあきらめてくれ。実はうちは貧シー {ノダ／ノダッケ}。 (=47)

### 5.2.4. ノダとノダッケの違い

以下、ノダとノダッケの相違点をまとめる。5.2.2. で見たとおり、ノダは野田 (1997) の記述する共通語の「のだ」と同じ用法を持っているが、ノダッケの使われる用法は限られている。つまり、

① 対人的な用法

② 前か後いずれかの文脈との関係づけが見られる

という場合のみ使用が可能になる。また、§5.2.3. のとおり、

③ 当該の情報が聞き手にとって未知である (と話し手が考えている)

という条件も加わる。つまり、ノダッケはノダにくらべて、「前後の文脈に関わることで聞き手の知らないことを説明している」という話し手の聞き手めあての態度がより明確に示されることになる。

9) 聞ガッチャ、言ワッチャは「聞かれた」「言われた」の意。

以上、ノダッケはノダの持つさまざまな用法のうち、①②③の全てを満たす場合しか使用することができない。これは、5.1.で示したノダッケの基本的意味に合致している。

(76) ノダッケの基本的意味

先行文脈に対する説明づけ、あるいは後の文脈の前置きとして、聞き手にとって未知と話し手が考えている情報を提示する。 (=42)

### 5.3. 談話的な特徴

ここでは、ノダッケが実際の談話で持つ特徴について、ターンの維持 (§ 5.3.1.)、聞き手への反発 (§ 5.3.2.) の2点を述べる。

#### 5.3.1. (前置きを述べることによる) ターン維持

まず、(77) の例を見られたい。

(77) (会話の冒頭で) この前、久しぶりに駅前に行ッタンダッケ。

このように、先行文脈と関係づけられずに用いられたノダッケは、後の文脈の前置きとして解釈される。したがって、そのあと必ず次の発話が続くことになる。

(78) 昨日、久しぶりに駅前に行ッタンダッケ。

そしたら、長崎屋がつぶれていてびっくりした。 (=2)

次の発話が続かないと、語用論的におかしな発話になってしまう。

(79) #昨日、久しぶりに駅前に行ッタンダッケ。 … (無言)

つまり、(77) のようなノダッケによる発話は、それ以降も発話が続けるつもりで発されたものであり、聞き手が無理にターンを奪わないかぎり、話し手のターンは維持されることになる。

このような特性から、(77) のように後の文の前置きを示すのに使われるノダッケは、自分のターンを維持したまま長々と話をつづけたい場合、繰り返し使われる。

(80) (テストの点が悪かった女子高生が友達に愚痴を言っている)

私、この間のテスト、点数悪ガッタンダッケ。それで、親に見せたら、ものすごく怒ルンダッケ。もう、おでこに青筋とか立てて、ヤバインダッケ。殺されそうにナッタンダッケ。それで、……

(81) こないだ、俺、黒木さんの家の引っ越し祝いに行ッタンダッケ。なんだか、けっこう立派な家ナンダッケ。それで、二人で飲んでたら、松丸さんも一升瓶持ってやってきてさー、……

(82) のように、ただの「質問-回答」という形では文脈との関係づけが希薄でノダッケが使えない文も、(83) のように次々と発話が続く形なら使用が自然になる。

(82) 保母：君は将来何になるの？

園児：#僕は将来野球選手にナンダッケ。 (=71)

(83) 保母：君は将来何になるの？

園児：僕は将来野球選手にナンダッケ。それで、ホームランをいっぱい打ズンダッケ。たくさん稼グンダッケ。それで、……

なお、ターンの維持に関わるのは、後の文脈の前置きを示すような用法であり、先行文脈の説明づけを示すノダッケはターンの維持に関わらない。

(84) 太郎：今日のパーティー休ませてもらうわ。俺、今、腹痛インダッケ。

次郎：わかった、みんなに伝えておくよ。

### 5.3.2. 聞き手への反発

ノダッケは、§5.2.2.3.で見たように、前後の文脈との関係づけが希薄な場合は使えない。

(85) 太郎：(次郎の傷つくことを言って) あ、ごめん。

次郎：#イーダッケ。#イーダッケ。気にするな。 (=69)

しかし、聞き手に反発するような場合、関係づけが希薄なようでも使えるようになる。

(86) 太郎：(次郎の傷つくことを言って) あ、ごめん。

次郎：このやろう、もう知ラネンダッケ。

このような場合も、5.3.1.で述べたのと同様の解釈ができる。つまり、(86)の次郎の発話でも、「お前に言いたいことはたくさんある」という態度、より具体的に言えば「実際にはこれ以上は言わないが、本当は(87)のように次々と文句を言いたいところである」といった態度が示される。

(87) このやろう、もう知ラネンダッケ。もう、愛想が尽キタンダッケ。お前の顔なんか、もう見たくもナインダッケ。…

このような含みがあるため、(86)は、一見前後の文脈との関係づけは希薄に見えるが、ノダッケの使用が可能になる。また、これも反発のうちに入るだろうが、聞き手にいじけた態度を見せる場合も同様のノダッケが使用される(実際には(89)のように言いたい)。

(88) 太郎：(次郎の傷つくことを言って) あ、ごめん。

次郎：(いじけて) イーダッケ。

(89) イーダッケ。どうせ僕なんて、馬鹿ナンダッケ。駄目ナンダッケ。…

以上のように、聞き手への反発を示す場合は、前後の文脈との関係づけが希薄に見えても、ノダッケが使える(ただし、「本当は後から後へと言いたいことがある」という態度が示される点で、後の文脈への関係性が潜在している)。

ただし、次々と言いたいことをあえて「言いとどめる」という態度でノダッケが使われるのは聞き手への反発が含まれる場合に限られ、それ以外の事情で後の発話を濁すような場合は、このようなノダッケは使用しにくい。

(90) (久しぶりに駅前に行ったら長崎屋がつぶれていたが、それがショックで、なかなか次のことばが出せない)

?昨日、久しぶりに駅前に行ッタダッケ。 … (無言)

## 6. まとめ

以上、本稿では福島方言のノダッケについて取り上げて論じた。本稿で述べたことは以下の通りである。

福島方言の文末詞ケは「思い出し」の意味しか持たない (§2.)。しかし、ノダにケが接続したノダッケという表現のなかに、「思い出し」の意味にはすぐわない用法のものが見られる (§3.)。本稿では、このノダッケを、ノダ+ケの形に分解できるものとは別の、ひとまとまりの固定した文末表現として分析した。その特徴は以下の通りである。

### (91) ノダッケの形態統語論的特徴

必ず平叙文の文末に生起する。また、いずれの文末詞とも共起しない (§4.)

### (92) ノダッケの基本的意味

先行文脈に対する説明づけ、あるいは後の文脈の前置きとして、聞き手にとって未知と話し手が考えている情報を提示する (§5.1.)。 (=42)

ノダッケは、ノダと同じく説明づけに関わる表現だが、ノダよりも使われる用法は限られており、ノダの様々な用法のうち、次の3つの条件を満たす場合にしか使えない (§5.2.)。

① 対人的な用法

② 前か後いずれかの文脈との関係づけが見られる

③ 当該の情報が聞き手にとって未知である (と話し手が考えている)

談話的な面で見ると、ノダッケは、後の文脈の前置きとして使われる場合、話し手のターンを維持することになる。そのため、長々と話を続けるような場合、繰り返し現れる (§6.1.)。また、聞き手に反発する場合、前後の文脈との関係づけが希薄に見えても使用できる (「たくさん言いたいことはあるが、これ以上は言わない」という含みがある) (§6.2.)。

以上、ノダッケの特徴を分析した。なお、ノダッケは、聞き手にとって未知のことを提示するという点で、他の東北諸方言のケにおける「報告」の用法とリンクしているかもしれない。つまり、福島方言のケも以前は「報告」のような用法を持っており、その「報告」のケがノダッケに化石的に残存しているのだ、という可能性も考えうる。しかし、十分な根拠がないため、そのような語源的な解釈は本稿では措くこととする。

## 【参考文献】

金田章宏 (1989) 「古典語文法と東北方言—「けり」と「け」をめぐる—」『国文学解釈と鑑賞』51-8

小林隆 (2004) 「終助詞「ケ」の歴史—方言形式の成立 (2) —」『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房

渋谷勝己 (1994) 「鶴岡方言のテンスとアスペクト」国立国語研究所報告 109-1『鶴岡方言の



記述的研究』秀英出版

- (1999) 「文末詞『ケ』—三つの体系における対象研究—」『近代語研究』10  
渋谷勝己・澤村美幸・大久保琢磨・松丸真大 (2006) 「山形市方言の文末詞シターベシタ・ガ  
シタの意味にもとづいて—」『阪大日本語研究』18 大阪大学大学院文学研究科日本語  
学研究室
- 高田祥司 (2004) 「岩手県遠野方言の非動的述語及び否定のテンス —〈過去〉の場合にお  
ける「ーケ」の使用を中心に」『日本語文法』4-2
- 竹田晃子 (2004) 「山形市方言におけるテンス・アスペクトと文末詞ケ」『国語学研究』43 東  
北大学文学部国語学研究室
- 田野村忠温 (1988) 「否定疑問文小考」『国語学』152
- (1999) 『現代日本語の文法I 「のだ」の意味と用法』和泉書院
- (1993) 「「のだ」の機能」『日本語学』12-11
- 長澤亜希子 (1999) 「秋田方言の終助詞「ケ」について」日高水穂編『秋田大学ことばの調査』  
1 秋田大学教育文化学部日本・アジア文化研究室
- 中田敏夫 (1979) 「静岡県焼津市方言の過去表現」『日本語研究』2 東京都立大学日本語研究  
会
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 半沢康・竹田拓 (2005) 『福島大学研究年報別冊 阿武隈急行グロットグラム調査報告(1)』  
福島大学
- 又平恵美子 (1996) 「終助詞の研究 —「っけ」の機能」『筑波日本語研究』1 筑波大学文芸・  
言語研究科日本語学研究室
- 松丸真大 (2004) 「静岡県榛原郡中川根町方言の過去表現」真田信治編『静岡・中川根方言の  
記述』大阪大学日本語学研究室
- 山口幸洋 (1968) 「静岡県方言の過去表現について」『国語学』75
- (1999) 「テンスに関わる過去表現「〜ッケ」の変容」『静岡・ことばの世界』2 静  
岡県方言研究会
- 吉田雅昭 (2004) 「東北方言における文末表現形式「ケ」の用法」『国語学研究』43 東北大  
学国語学研究室

---

しらいわ ひろゆき (大阪大学大学院生)

shira2940@gmail.com